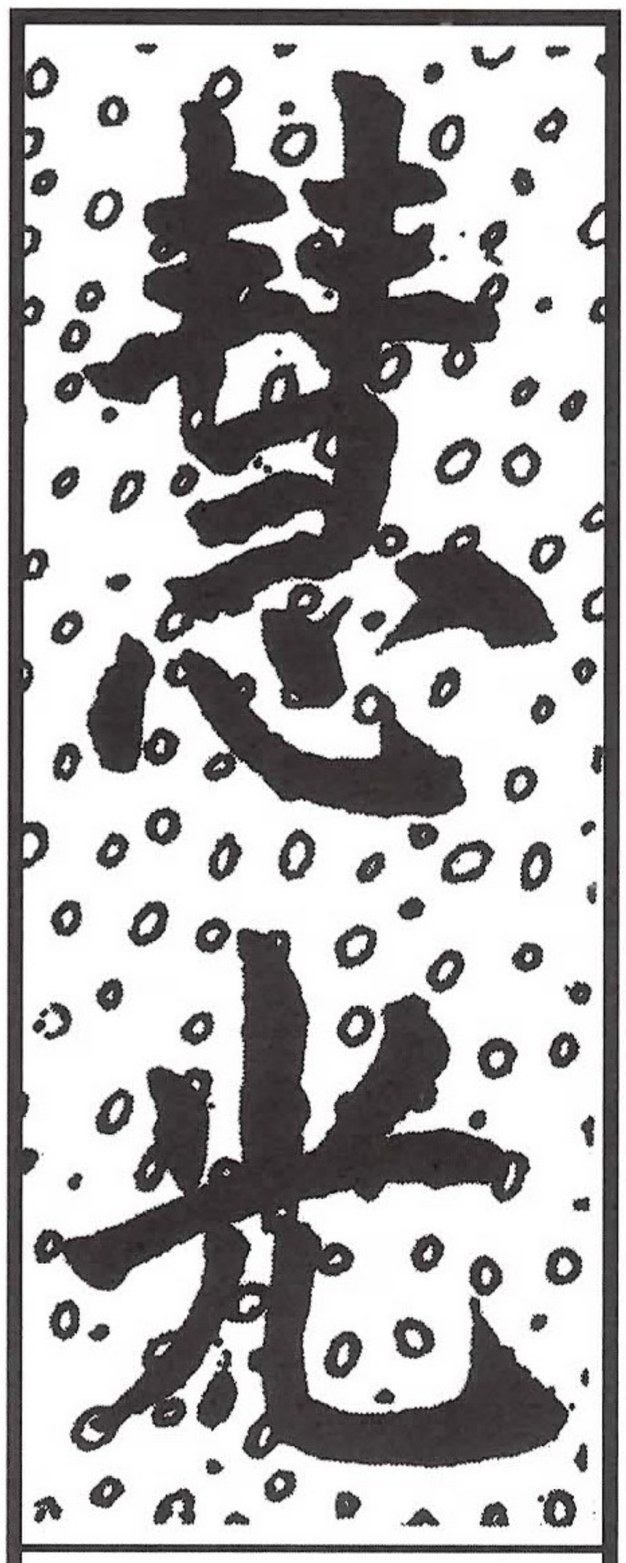

Echo　No.173
令和6年　盂蘭盆号
羽村臨済会　＊　一峰院　＊　禅福寺　＊　禅林寺　＊　禅宗寺

「あなたは何を残しますか」

良寛さんの辞世の句は

「形身とて　何か残さむ　春は花
夏ほととぎす　秋はもみぢ葉」です

私達は何を残せるでしょうか。私事で恐縮ですが、0歳の時、両親に連れられて、この羽村、川崎の宗禅寺に来て、七八年が過ぎました。最近しみじみと、私はこの地に、この寺に育てていただいたんだなと思います。歳をとって、残りの人生を思い、ふりかえりの時を迎えたのでしょうか。

この地で小・中学校に学び、高校にも大学にも行かせてもらいました。鎌倉での修行が終わり、三十歳で寺に帰り、消防団や青年会議所、副住職の身軽さもあって、実に自由奔放にやりたいことをして来ました。只、その時その時の状況の中で自分の出来ることをさせていただきました。

今、寺で法事や葬儀をさせてもらい、檀信徒の方々には〝私たちは両親のおかげで命をいただき、たくさんの命のおかげをいただいて生かされているですから、おかげさまの心をもって、おかえしをしていきましょう〟と、申し上げ、何をするのかというと〝自分のいる場所で自分の出来ることを、ありがたくすることが、おかえしになっていることを自覚してやりましょう〟と申し上げています。

子供も大人も自分のいる所で、自分がすることをするということです私たちには一人一人〝種智（しゅち）〟という素晴らしい宝物があります。自分を信じて、又、まわりの人もそれを育ててあげる気持ちが大切だと思います。

寺にいる人間として檀信徒に接する時には、つとめてその気持ちを忘れないように心がけています。この世は皆で作り上げていく大切な場所です。一人の力、みんなの力が必要です。

では寺としてはどうでしょうか。私は、寺は檀信徒や地域社会、みんなの為に存在していると思っています。とりあえずお寺をお預かりしていますが、そこで思うことは、寺という場所をみんなで使える所にしていこうという事です。寺には本堂や客殿、別の場所に三つの建物があります。副住職の時から、それらの建物が、いつかみんなの役にたてるようにと考え、少しずつ形を作ってきました。今、それらの建物は志ある方々が、寺族と相談しながら有効に活躍しています。寺が多くの方々に色々使われていくことは、実にありがたい事です。寺に限らず、みんなで共有出来るものは、ありがたく使わせていただきたいものです。

個々の努力が積み重なって、素晴らしいものを残していくことが出来ます。

そして、それを見守るのが、良寛さんの「形見とて、何か残さむ、春は花、夏ほととぎす、秋はもみぢ葉」です。

（宗禅　正俊）